

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 5 月 10 日現在

機関番号：24403

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21592916

研究課題名（和文）生活の場としての看取りを支える特別養護老人ホーム看護職への教育プログラムの開発

研究課題名（英文）Development of Educational Programs for the Nursing Staff to Support End-of-Life Care in Special Elderly Nursing Homes

研究代表者

長畑 多代（NAGAHATA TAYO）

大阪府立大学・看護学部・教授

研究者番号：60285327

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、特別養護老人ホームでの看取りを支える看護職への教育プログラムの開発である。フォーカスグループインタビュー及び個別面接調査の結果から、看取りケアにおける看護職の役割と看護実践を分類、整理した「看取りケア振り返りシート」を作成し、これをツールとした教育プログラムを考案し、実施した。参加者がシートを用いて自施設の看取りケアを振り返り、課題解決に向けた取り組みを推進する本プログラムは、現状に合った役立つ内容であると参加者から評価された。

研究成果の概要（英文）：

The goal of this study is to develop educational programs for nursing staff to support end-of-life care in special elderly nursing homes. From the results of focus group interviews and individual face-to-face interviews, an “end-of-life care review sheet” was created to classify and organize nursing practices and the roles of nursing staff in end-of-life care, and an educational program was devised and implemented in which this is used as a tool. This program, in which participants reviewed their own facilities using this sheet, and promoted efforts to improve problem resolution, was evaluated by the participants in terms of what content was helpful in the current situation.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
2011年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	2,500,000	750,000	3,250,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学 地域・老年看護学

キーワード：老年看護学・看取りケア・特別養護老人ホーム・教育プログラム・看護職・看護実践能力

### 1. 研究開始当初の背景

高齢社会の到来、核家族化による独居老人や高齢者世帯の増加に伴い、特別養護老人ホーム（以下、特養とする）への入居希望者は増加し、施設での看取りケアの充実が期待されている。生活の場である特養では医師の常駐が義務づけられてはいないため、看護職には唯一の医療職としての役割が求められている。しかし、予測が難しい高齢者の身体状態を的確にアセスメントし、安楽な状態に整え、本人と家族の希望に沿った看取りへと導くケア方法については未だ確立されていない。また、看取りケアに対する意識や意欲、経験についての施設間格差が大きいという現状であり、今後の増加が見込まれる特養での看取りにおいて質の高いケアを提供するためには、看取りを支える看護ケアの標準化は急務である。

### 2. 研究の目的

本研究では、看取りの経験が豊富な熟練看護師の実践的知識を質的帰納的に分析し、看取りの段階ごとに、情報収集や観察項目、アセスメントに基づいた看護ケア方法、家族やケアチームとの連携における看護職の役割等を体系化するとともに、これに基づいた教育プログラムを開発することを目的とする。実践に基づいた教育プログラムを開発することにより、特養での看取りを支える看護実践能力の向上、及びケアの標準化に寄与すると考える。

### 3. 研究の方法

#### (1) 特養の看取りケアの実態調査

WAM ネット上で、看取り介護加算ありと登

録されている 233 施設の特養看護職リーダーを対象に、郵送自記式アンケート調査を行った。調査内容は看取りにおける看護職の役割、看取り実践上の不安や困難、研修の実施状況と希望内容等であった。属性等は単純集計し、自由記述は意味内容にそって分類、整理した。

#### (2) フォーカスグループインタビュー

看取りの実績のある特養の看護職リーダー5名を対象に、看取りにおける判断とケア実践、連絡・調整の内容の実際について、フォーカスグループインタビューを行った。分析方法は、逐語録から、看取りの全過程における看護職のケア実践や連絡・調整内容について、意味のあるまとまりごとにコード化し、意図や判断の類似性によって分類・整理し、カテゴリー化した。

#### (3) 看護ケアプロセスの体系化に向けた個別面接調査

看取りケアを経験している 22 施設の看護職リーダー24名を対象に、施設内で自然な看取りを支援できた事例の支援内容、その意図について、半構成質問紙を用いた個別面接調査を行った。分析方法は面接逐語録または面接メモから、看取りにおける入所時点からの支援内容を時系列に沿って書き出し、その意図の類似性から時期ごとに分類・整理した。

#### (4) 看取りを支える看護実践リストの作成

個別面接調査で得られ内容をもとに、看取りを支える看護実践リスト案を作成し、これを 43 施設に郵送し、看護職リーダーにリスト案の項目が看護職の実践内容として妥当

かどうかを問い、さらに追加する看護実践があれば記述してもらった。その結果をもとにリスト案に挙げた看護実践の内容が妥当であるか検討し、表現の修正、実践内容の削除および追加を行った。

#### (5) 看取りを支える特養看護職に向けた教育プログラムの実施・評価

調査結果より作成した看護実践リストを活用する教育プログラムを考案した。教育プログラムは3回の研修会で構成され、参加者が各自の施設で課題を見出すとともに、解決に向けた取り組みを実践・評価し、これを共有するものであった。(図1)

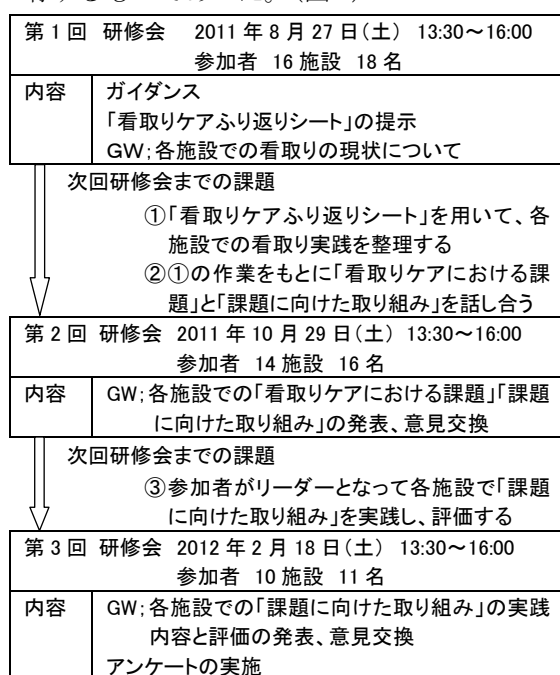


図1 教育プログラム

13施設の看護職15名から申し込みがあり、教育プログラムの評価として、研修の適切性等に関する5件法または3件法による質問項目及びプログラム全体に関する自由記述からなるアンケート調査を実施した。

#### (6) 倫理的配慮

(1)~(5)の各研究を行う際、所属大学看護学部研究倫理委員会の承認を得て実施した。

## 4. 研究成果

### (1) 特養の看取りケアの実態調査

調査票の回収は61件であった(回収率26.2%)。看取りケアを行う上での不安や困難として、医師が常駐していないことにより死亡確認がスムーズに行えない、連絡が取りにくい場合があるなど「医師をあてにできない」現実が明らかとなった。受け入れ病院が少なく「病院の協力を得られない」こともあげられた。また、看取りケアの経験不足や未熟さがあるため「介護職に任せきれない」ことや、必ずしも協力的とは限らないため「家族とうまく連携できない」ことも抽出された。さらに、本人に意思を確認できないことから、自分のケアが「これでよいのか評価できない」不安が明らかとなった。希望する研修内容は、「ケアチームの連携」が47施設と最も多く、次いで「家族への支援方法」、「終末期の高齢者の日常生活援助」、「身体的苦痛、症状のアセスメントと緩和ケア」が多いという現状が明らかになった。

### (2) フォーカスグループインタビュー

特養での看取りケアにおける看護職の役割のコアカテゴリーとして、「ケアチームのキーパーソンとなって看取りケアを創りあげる」ことを導き出した。その具体的な内容として、「介護スタッフにも最期まで看取る覚悟を決めてもらうよう促す」「日常ケアにあたっては介護スタッフの不安を軽減する」など、看護職と比較して人の死に免疫がなく、不安や恐れを抱きやすい介護スタッフを心理的にサポートをする役割が抽出された。さらに、「家族の揺らぎや不安に応えつつ意思を固めてもらうよう支援する」というように、その時々によって揺らぐ家族の気持ちを受け止めつつ、医療職として高齢者の状況や見通しを伝え、医師とコンタクトが取れるよう調整す

るなど、施設での自然な看取りを選択したことに対し、家族が納得できるように寄り添い、整えていく役割を担っていた。また、高齢者の身体状態の観察から変化を察知し、スタッフと家族に＜看取りの時期を判断して知らせる＞とともに、協力病院や医師への連絡、本人の安楽に向けたケアの実践など、＜時期に応じて看取りに必要な調整を行う＞ことで、一人ひとりにあった看取りケアを創りあげてることを明らかにした。

### (3) 看護ケアプロセスの体系化に向けた個別面接調査

看取りケアのプロセスには、[看取りを前提に入所を受け入れ、調整する時期]、[看取りが近いことを察知し、準備する時期]、[実際に看取る時期]、[看取り後の時期]の4つの時期に分類した。看護実践は「高齢者」「家族」「他の入所者」に対するケアと「介護職」「医師」との連携内容に分類された。

[看取りを前提に入所を受け入れ、調整する時期]には、高齢者に＜施設の受け入れに向けての査定をする＞、家族への＜看取りの意向確認を行う＞などがあった。[看取りが近いことを察知し、準備する時期]には、高齢者に＜看取りの時期が近いことを察知する＞、家族には、＜施設で看取るか最終的な判断を促す＞、介護職とは＜看取りが近いことを知らせ、ともにケアを考える＞、医師とは＜看取りがスムーズに行えるよう協力を仰ぐ＞等、施設での看取りに向け準備が行われていた。[実際に看取る時期]では、高齢者に＜苦痛のないケアを行う＞、家族には＜家族の心残りがないよう援助する＞、介護職には＜対応の方法を指示し、ケアの不安を軽くする＞など支え、医師とは＜連絡調整により、看取りをスムーズにする＞など連携が行われていた。[看取り後の時期]には、家族に＜家族と職員が思いを共有することで満足

感を感じてもらおう＞、他の入所者には＜施設でのお見送りをする＞＜周囲への影響を考慮する＞の援助を行い、介護職に対して、＜事例を振り返り、今後に活かす＞ことが実践されていた。

### (4) 看取りを支える看護実践リストの作成

(3)で明にかなった看取りの看護実践をもとにリスト案を作成し、調査の結果をもとに修正を行った。その結果、[看護師独自の実践]、[施設の状況による実践]、[他の職種との協働による実践]に分けられた。[看護師独自の実践]は、高齢者の身体状況の把握に関する＜医療・健康に関する情報を収集する＞＜看取りの時期が近いことを察知する＞、介護職を支える＜介護職の負担の軽減を図る＞＜ケアの具体的な方法を指導する＞であった。[施設の状況による実践]には、＜生活の状況を情報収集する＞＜家族に施設での看取りを説明する＞＜家族の看取りの意向確認を行う＞などの看取りを前提に入所を受け入れ、調整する時期で、相談員・介護支援専門員が主に行う、または協働で行う実践であった。また、看取り後に行われる＜施設でお見送りをする＞＜周囲への影響を考慮する＞が施設の状況により異なっていた。[他の職種との協働による実践]は、実際に看取る時期の高齢者に対する＜これまでの生活を続けてもらう＞＜苦痛のないケアを行う＞＜希望をかなえる＞、家族に対する＜心残りがないようにする＞が、介護職と協働して行うものであった。

### (5) 看取りを支える特養看護職に向けた教育プログラムの実施・評価

研修回数、時間について全員が「ちょうどよい」と答え、研修の運営は適切であったと考えられた。研修テーマについては、14名が「わかりやすい・ややわかりやすい」と答え、

職場の現状に沿ったものかを問う質問には13名が「そう思う・ややそう思う」と答えていた。また、今後役に立つ内容の研修かという問いに対しては13名が「そう思う」と答えていた事からも、研修内容は研究協力者に適していたと思われた。自由記述では「情報交換ができてよかった」「原点をスタッフ一同でもう一度振り返りながら行うことが出来た」等の意見があった。参加者が各職場のリーダーとなって施設での課題に取り組み、そのプロセスをグループワークにて共有しながら進めていく本プログラムは、他施設の状況を知るとともに看取りケアのあり方を振り返り、自施設での課題を見出す機会になったと考えられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 長畑多代、松田千登勢、山内加絵、江口恭子、山地佳代、生活の場である特別養護老人ホームでの看取りを支える看護実践の内容、老年看護学、16 (2)、2012、72-79 (査読有)

[学会発表] (計4件)

- ① 長畑多代、松田千登勢、山内加絵、江口恭子、山地佳代、生活の場である特別養護老人ホームでの看取りを支え得る看護実践リストの検討、日本老年看護学会第16回学術集会、2011年6月16日、東京
- ② 長畑多代、山内加絵、松田千登勢、江口恭子、生活の場である特養での看取りを実現するために行っている看護職の支援内容、日本看護科学学会、2010年12月3日、北海道
- ③ 山内加絵、長畑多代、白井みどり、松田千登勢、生活の場である特別養護老人ホームでの看取りケアとその研修ニーズに

関する実態調査、日本老年看護学会 第15回学術集会、2010年11月6日、群馬

- ④ 長畑多代、山内加絵、白井みどり、松田千登勢、生活の場である特別養護老人ホームでの看取りケア実践における看護職の役割—看護職リーダーへのフォーカスグループインタビューを通して—、日本老年看護学会 第15回学術集会、2010年11月6日、群馬

#### 6. 研究組織

##### (1) 研究代表者

長畑 多代 (NAGAHATA TAYO)  
大阪府立大学・看護学部・教授  
研究者番号：60285327

##### (2) 研究分担者

山内 加絵 (YAMAUCHI KAE)  
大阪府立大学 看護学部 助教  
研究者番号：40363197  
松田 千登勢 (CHITOSE MATSUDA)  
大阪府立大学・看護学部・准教授  
研究者番号：70285328

(2009：連携研究者)

江口 恭子 (EGUCHI KYOUKO)  
大阪府立大学 看護学部 助教  
研究者番号：10582299

(2010～研究分担者)

山地 佳代 (YAMAJI KAYO)  
大阪府立大学 看護学部 助教  
研究者番号：80285345

(2010～研究分担者)

白井 みどり (SHIRAIISHI MIDORI)  
大阪市立大学 医学部 教授  
研究者番号：30275151

(2011～2012：連携研究者)